

はねだ むしづか  
埴田の虫塚

種 別	小松市指定文化財 史跡
指定年月日	昭和38年11月3日
所 在 地	埴田町

江戸時代の天保年間（1830～1843）は、凶作や飢饉、疫病の流行などが続き、一揆や打ちこわしなどが相次いだ。その中で天保10年（1839）は好天に恵まれ、人々は豊作を期待していた。しかし、7月中旬からこぬかむし糠虫（ウンカ）が大量発生し、出穂期の稲に大きな被害を与えた。ウンカは稲の茎や花の汁を吸い、稲を枯死させてしまう害虫である。

この大規模な虫害に対し藩は、木の実油を水田にまいて油膜をはり、そこに虫を払い落として窒息させるという駆除法を村々にとらせた。駆除された虫は木綿袋に集められ、埴田村では23俵にも及んだといわれる。

駆除に尽力した徳橋組十村役の田中三郎衛門は、23俵の虫の袋を地中に埋め、虫への供養の意味をこめてそこに虫塚を建てた。そして後世のために、碑文に害虫が発生した場合の対処法を記した。

後世のために残した貴重な免災の資料であると同時に、害虫でありながらもその供養のために作られた虫塚は全国的に見ても数少ないものである。

なお、岩淵村（現岩淵町）でも同様に16俵の虫の袋を埋めて虫塚が建てられ、現在は岩淵町白山町神社の境内に移されている。

